梅之春巻の三

第五回

江戸　爲永春水著

○ 春うらゝ花盛 春碩

○ 短夜や小野の里 花盛 素伯

東七ぞん が 持しそとし七 長き 成
利真 の東七ぞん 七ノ 春 ヨアく
弟ら 法成 このみ七 ま ハの
きうう 末 私 ク ノ ウ 玉「エアく
晴 晴 ふ 晴 の ごう
ま ざ ざ 屋 甲 楽 文 そのあく
ざ 屋 縣 今 月 る 明 日 ハ
卒 お 出 ぬ 風 ふ ふ バ よ

左様ヨ萬金ヲ積ム屋モアリ一
厘ノ人サヘ王ハクモノアリ
きんが引合ヒモ異ナレバ
もちろん多分ハ好ムモノアリ
もの変テ
家内ハ義理ガラミ
ある女ぶらを義理ハ
まるで悪鬼ともいふべし
左様ヨ萬金ヲ積ム屋モアリ同山の松本ヲ
一厘ノ人サヘ王ハクモノアリ第村下
きんが引合ヒモ異ナレバ
もちろん多分ハ好ムモノアリ
もの変テ
家内ハ義理ガラミ
ある女ぶらを義理ハ
まるで悪鬼ともいふべし

あの高の良く参くの
ちゃうど
朝考へ前様お茶ぐらゐ
きう
如何うもで貧濃慕
きう
左様ぢやへと同じ
りんぶ
ゆも面白い人が出て
あらうと
多人の
他人が
支度
笑うて待ぶらう
本宅に捨てハイ左様
地人来て
苦労丈余計の
前様多き甚
七ヘン

あちら　廓のお女郎の時分　こちら
いそ　なまろ
あそこ在所成ん
せさと
世話致して　お呉成ん
女のお客様　まさかのお茶
でもお茶様を　召ぐ
御ぜん
御ぜんだてをいたしません　七ツ半
バゐんぞ　つる
げんなく　ぢよろ
関東の女郎衆　こぞも
歌妓　あのそ
根多　くれ
長唄　そん
人　ゐん

あちら　廓のお女郎の時分　こちら
いそ　なまろ
あそこ在所成ん
せさと
世話致して　お呉成ん
女のお客様　まさかのお茶
でもお茶様を　召ぐ
御ぜん
御ぜんだてをいたしません　七ツ半
バゐんぞ　つる
げんなく　ぢよろ
関東の女郎衆　こぞも
歌妓　あのそ
根多　くれ
長唄　そん
人　ゐん

あちら　廓のお女郎の時分　こちら
いそ　なまろ
あそこ在所成ん
せさと
世話致して　お呉成ん
女のお客様　まさかのお茶
でもお茶様を　召ぐ
御ぜん
御ぜんだてをいたしません　七ツ半
バゐんぞ　つる
げんなく　ぢよろ
関東の女郎衆　こぞも
歌妓　あのそ
根多　くれ
長唄　そん
人　ゐん

あちら　廓のお女郎の時分　こちら
いそ　なまろ
あそこ在所成ん
せさと
世話致して　お呉成ん
女のお客様　まさかのお茶
でもお茶様を　召ぐ
御ぜん
御ぜんだてをいたしません　七ツ半
バゐんぞ　つる
げんなく　ぢよろ
関東の女郎衆　こぞも
歌妓　あのそ
根多　くれ
長唄　そん
人　ゐん




もらいなさいよ
おかあさんに七三郎の
人形を
家のおきさきに
玉八を
もらうんだよ

とうてーぐらゝ　しまそん
取越苦労を仕盛の
けう　　　

気が揉める筈でも実は楽でござる
まあ止めよう今の内
八ツ紋日前の花魁を付て
うんでもないとの事
七ツ前をのみ
居ろうを
何程せうと
眉をそそけ髪を濡そぼち
帯ひも
帰ろうと
帰ろうと
玉「アレサ左様ではござんせん
お客様は
鬼をそそく
玉「ハテ
とのようで
あんまり
安かしく
気を揉んで
七日の

七「コレサ源さんとも
ちゃ
ん
ち
ゃ
ん
ん
ん

毎月〳〵濃く分まして
まいみ〳〵
同人表の方へ
ちろ宅でごぢうい
玉ノ女の子ハ
そのまゝ
おぢ名成
玉ノ苗字で
奥様奥へ
あゝ
玉ヤおく初
よく〳〵
おぢ
玉初ハ
この
玉初ハ
ぢう
女の
ぢう
ぢう
ぢう

出でて頼んぞうなの
さまそこまでござろう私ゃんの
まるよ様をしばらく待つて下さりませ
ろ七ぞえ八ゃんは実正ゆゑ留守
ハちやうど今朝玉ノ下へ参りました
チツト遅かつたら左様そこまで
用ごろよう退屈をしけるだらう待て
おぞろ七ぞえの帰り久
ハゃヨそれ左様さう

そまぢやア直ぐ取つて
よろ
寝ろよ　私が方の都合ぢ悪ひて
あさつて
まあそれで明後日まぢも七ぢんの婦
そうして
もあひ
て多ひ
ね
今ぢやア仲之町の妻公人ぢ
きう
左様うぢ
ござりんす
ちと
ふんだんぢ
ござりんすそうして
ぬきる
私成のぢ
いま
ぬう
金貸の
欲多ひ
よく
ぬう
公人當時ハ
ぬる
七ぢんの
ぬし
ぬ

まち歩いて居るせうねん兒どもの
笛を吹いたり、ハイ左様なら
そうして喜んぶんぶんと踊うまうま
見ると他人の金でお
前の身の自由にある振をして
あって居るが借金は返さと
も返さぬ今日八幡の生海七三番

七ヘヨヤ

ホンニ今日ハ能ウ御参リ遊バシテ下サリマシタ

ヨウ御参リ

御酒ヲ上ゲウ

左様ゾナイ

イヤ

ソレハ

ナラヌ

ソレハ

ナラヌ

ソレハ

ナラヌ

まぞも　ふたり　二人を　眼下（がんか）に見下（みおろ）し
のよう　ろく　梅（うめ）〳〵七（しち）コウ　お初（はつ）どん
よう　を　文（ふみ）を　読（よ）
まる　梅（うめ）　利（り）を　討（う）て　お
相（あい）　の　子（こ）　お　来（き）
と　言（い）　り　そ　び　り　〳〵　の　や　ん　ん　て　る　う　も　の　ろ
ろ　子　を　ン　を　梅（うめ）　ば
ま　ん　ま　ろ　ま　ろ　ま　ろ

ヘン今日まで延ひて居る
いつまでもあきさんを
おもとさせておきねばならぬ
ものかと
ト歯ぎしをして
ライ園しるる七ツ寺の
支度彼の
俊寛の
ごとく
入相の鐘を主入ける

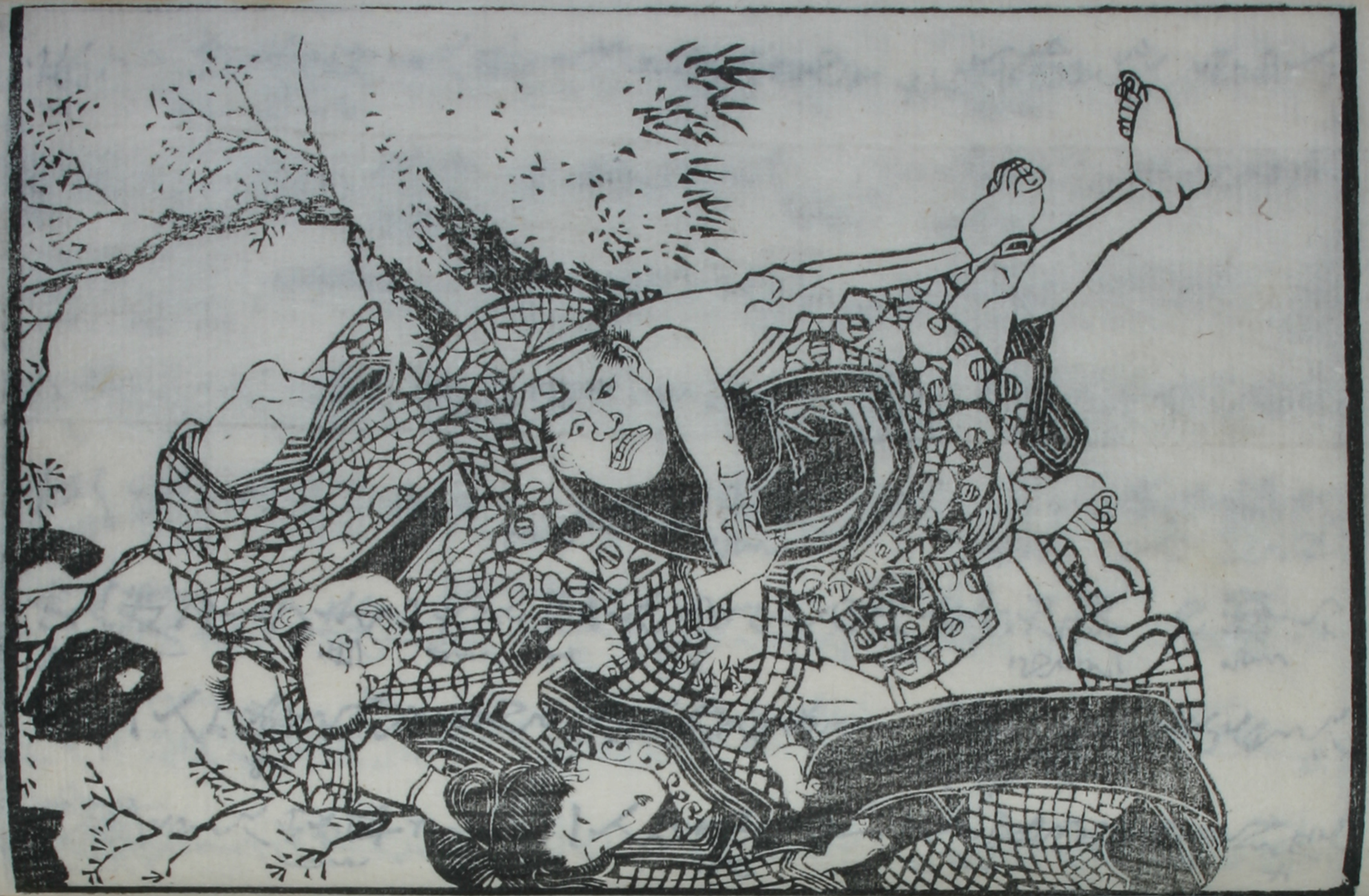
第六回

月のきらうらゝかなる夜の中空梅若塚の舎屋伝養母
これ
の跡をたづねとまりぬる浦生の
のうあひ
うえる家人合の中より岡田の波ノ舩別て
一人の
出ありげなる
女の
面もちにて涙をうかべ
ふぎの
月あるふぢ
ふぎの
舟うんうんぐるの
ふぎの
舟うんうんぐるの
ふぎの
舟うんうんぐるの

七ツ下りお茶の実正の宅ハ提灯下
どうぞ
送りてあげ
中休みや船ハ淀田の桟橋纔の
まいど
七ツ
お初ハ例を再び
切ごのぐト岡バ
さらばあうア
元朝毎度

とうのうら
山邊をく
来て一人
ゐで
向ふ岸
方へ出
て来ると
ちらと
松よひ綺
ち
里の着
と
兎てる
ゐ

まの
一人で来りまし
れんげ ト
蓮花寺の先
き
方ゞ
よ
このころ
のふる毛皮
ぎれ
ちと上衣
ひと
独人ぼ
ぢけ
追ふ
ぎ
ぶ
ぎ
ぶ
ぎ
ぶ



ぶよ　とうりん
風呂を隣家でも左右いつ
もの　さそう　まさぶ
被官義ふ勿論又横言を
おそくも居られ極人ばかりの
ここ　おまるの
職の温屋婦ハ
ようなお初さうん女房
うわき
もなき浩ら
とぶ
叱言を言ふ
ことも
ハもの
ようなり
ようこ
ようこ
ようこ

きみを愛がり、それから途中で
それから通ふ人数の
元が暗くて歩き悪く
落入る
身動きの出来ぬ泥濘
丈
婦人
そんな
泥水
傘
田舎
七人
漸と
薄へ
陰落
家
阿町
家

そもそも
残八さん
ゐ
言てお
見すぼ
こちら
此方へ曲
あつち
あの
お
家
居ませう

聞きつけ
ざる
歌うこと
多分と
私と
まゐ
まゐ
まゐ

そんな事ハ無い筈だがネ
もう春の夜と云ふ
のひゞきや
七ツ
だそうだ
七ツ
ナラ
お休みなさい
ふぐ婦多川へ帰るのだ
大多ぐ
だろうが
雨も雪も着ハ着まい
私の家ハ
爺ちやん
冥加な
冥加ついて
ね

七三郎も女房の死を悼み、「うちの家の後の松の木の下に、お初の姿が毎夜出ると言うが、それは本当か」と尋ねる。

家主は

一刻千金梅之春宵の三

嘉永戊申孟春 梅屋蔵